

日本小児科学会成育基本法推進委員会

「こどもまんなかワークショップ」実施報告書

1. はじめに

本ワークショップは、「こども基本法」の理念である「こどもまんなか」を具現化し、「医療における子ども憲章」の理念に基づき、小児保健・医療のテーマについてこども本人の声を直接聴取し、今後の医療体制や政策提言に活かすことを目的として開催されました。

今回は、「ぼくとわたしが考える、こどもの保健・医療にのぞむこと～ワクチンってどんなイメージ？」をテーマに、保護者とこどもが小児科医と共に考え、意見を交換する場を設けました。

2. 開催概要

日時：2025年12月7日（日）13:00～15:30

会場：順天堂大学医学部

方法：講義、対面でのグループディスカッション

参加費：無料

参加者数：8名（親子4組）（小学校4年生～中学校3年生とその保護者）

当初7組の申し込みがあったが、インフルエンザ感染等により4組の参加となった。

会場：順天堂大学医学部

後援：文京区教育委員会

講師・ファシリテーター8名：田中 恭子、種市 尋宙、小松 充孝、西崎 直人、
澤田 雅子、門田 行史、小坂 仁、永光 信一郎

3. プログラム詳細

時間	内容	担当
13:00 - 13:05	はじめの言葉	日本小児科学会理事 小坂 仁

時間	内容	担当
13:05 - 13:10	本日の趣旨説明	成育基本法推進委員会 委員長 順天堂大学小児科 田中 恭子
13:10 - 13:20	おはなし①：もしもこの世にワクチンがなかったら？	賛育会病院 小児科 小松 充孝
13:20 - 13:30	おはなし②：副反応や痛みへのケアについて	富山大学附属病院 小児科 種市 尋宙
13:30 - 13:35	質疑応答	
13:35 - 13:45	休 憩	
13:45 - 14:45	グループワーク（親とこどもに分かれて意見交換） トークテーマ： ・もしもこの世にワクチンがなかったら？ ・副反応や痛みへのケアについて ・もっとこうなったら良いのに 国へのリクエスト	ファシリテーター： 西崎 直人、澤田 雅子、門田行史など
14:45 - 14:55	休 憩	
14:55 - 15:15	グループ発表	
15:15 - 15:25	総合討論	
15:25 - 15:30	おわりの言葉	日本小児科学会理事 井原 健二

4. 専門家からの知見の共有（講義概要）

4-1. 田中恭子委員長による導入「本日の趣旨説明」

ワークショップの冒頭で、田中委員長は本会の目的を「子どもにどうあるべきか、ではなく、子どもと共に考える」ことにあると説明し、子どもの意見がちゃんと聴かれる機会を増やす**「子どもアドボカシー」を紹介しました。本会が、「医療における子ども憲章」**の理念を具現化するものであり、家庭、地域、医療など様々な場面で子どもの意見が尊重される文化の啓発に繋がることを明確にしました。



4-2. 小松医師による講義：「もしもこの世にワクチンがなかったら？」

ワクチンがなかった時代の天然痘の流行（伊達政宗の例）から、ワクチンの発明とその仕組みを解説。ワクチンを「悪さをしない練習用の敵」として体に入れることで、病気と戦う「防御チーム（免疫）」の練習試合を行う仕組みを説明し、こどもが接種するワクチンによって約17～20個の病気が予防できるという事実を共有しました。

4-3. 種市医師による講義：「副反応や痛みへのケアについて」

注射が痛いのは、人間の体には全身に「神経」があり、痛みを感じることで元気に生きていく上でとても大事なことであるためと説明。その上で、痛みを軽減する具体的な方法と

して、「深呼吸」「針を見ない」「指で押さえる/氷で冷やす」といった自分でできること、そして「麻酔クリーム・パッチ」「細い針」「マイクロニードルパッチ（未来の技術）」など、病院でできることや最新の研究動向を紹介しました。



・ワークショップでの「こどもの声」（意見の集約）

グループワークでは、人数が少ないながらも「予想したよりはるかに多くの発言があった」とのファシリテーター報告があり、こどもたちの率直で示唆に富んだ意見が数多く出されました。

1) 痛みと接種方法に関する具体的なリクエスト

- 技術革新への要望：「痛くない針作ってほしい!」、「シールのワクチンにしてほしい」、「全てのみ薬にしてほしい!」、「鼻のワクチン、くちのワクチンをもっと発展させてほしい」。
- 感覚の改善：「痛みじゃなくて少し気持ちいいとかんじられるワクチンをつくってほしい」。



2) 医療環境・コミュニケーションに関する要望

- 情報開示と説明：「副作用も含めてきちんと知りたい」、「大人だけに説明するより、子どもに説明してほしい」。
- 接種体験の改善：「映画を見ながらとかならやりたい」、「映画館で、ワクチンを打ってくれるとめっちゃくちゃ良い!」、「ゲームやりながらだったらたぶん注射もやってる」。
- 医療者の配慮：「白衣じゃなくて普通の服をきた先生などに打ってもらいたい」、「看護師さんにおさえてもらうのもいたいし、こわいからやさしくおさえてもらいたい」。

6. 参加者アンケート結果の概要

ワークショップは、こども・保護者双方から極めて高い評価を得ました。

- こどもの理解度：講義は全員が「とてもわかりやすかった（75%）」または「わかりやすかった（25%）」と回答。自分の意見は「じゅうぶんに話せた」との回答が多数でした。
- 保護者の評価：ワークショップを通じて「意識や理解が大いに深まった」（100%）、「こども自身が意見を表明する場は非常に重要」（100%）と、全員が最高の評価を下しました。
- 次への期待：こどもからは「未来の医療」、「ワクチンの副作用」など、保護者からは「夏休み期間での開催」や「継続的な意見聴取の場」への強い期待が寄せられました。

7. 結びに：参加医師団からのコメントと今後の展望

本ワークショップは、小児科医の先生方による温かく的確なファシリテーション（西崎医師、澤田医師、門田医師ら）により、子どもたち一人ひとりの率直で貴重な声が十分に引き出された、非常に実りある会となりました。

本ワークショップにおいて、「ワクチン」をテーマに4名の子どもと対面形式でディスカッションを行う試みは、とても新鮮でした。小児医療においては、医療者側の視点から議論が進められることが多い中、子ども自身を主体とした意見聴取の場が日本小児科学会の委員会主催で設けられたことは、従来の枠組みを超える意義深い実践であったと考えます。日本小児科学会が掲げる「子どもの代弁者（アドボカシー）」とは、小児科医が子どもの健康と権利を守るため、子ども自身の声や真意を汲み取り、それを家族や社会へ適切に伝える役割を担うことを指します。個人的にも本概念を理論的には理解していたものの、今回のワークショップを通じて、子どもたちの肉声に直接触れ、ワクチンに対する率直な意見や価値観を共有できたことは、アドボカシーの実践的意義を再認識する貴重な機会となりました。特筆すべきは、ファシリテーターや参加者同士が初対面であったにもかかわらず、過度な誘導を必要とせず、子どもたち自身から主体的かつ活発な発言が自然に引き出された点です。さらに、ワクチンという医学的専門性の高いテーマでありながら、その意義、接種時の痛み、事前説明の重要性、個人防御のみならず集団免疫に対する理解など、極めて本質的かつ鋭い視点が次々と提示されたことには大きな驚きでした。また、子どもたちの世代においては、ワクチンを含む医療行為に関する情報提供の手段として、YouTube等の動画コンテンツが強く求められていることも明らかとなりました。この点は、われわれ世代の小児科医が診察室や医療機関内での説明のみに依拠しては、子どもたちの日常的な思考や情報接触の実態、さらには潜在的ニーズを十分に把握することが困難であることを示唆しており、本ワークショップで気づかされた今後の課題の一つであると考えます。今回のテーマはワクチンでしたが、小児医療における様々なテーマにおいても同ワークショップは非常に意義深いものと推察します。子どもたち自身の声や真意を継続的に汲み取る場を設けることの重要性を強く認識するとともに、今後も本ワークショップが継続・発展していくことを切に願っております。小児科医として、またファシリテーターとして、このような貴重な学びの機会を提供していただいたことに、心より感謝申し上げます。（こどもグループ担当：西崎直人）



子どもたちはとても自然体で、よく発言してくれたのが印象的でした。ワクチンの歴史や仕組みについてのお話のあと、ワークショップでは子どもたちと「どんなワクチンがあったらいいと思うか」「ワクチンを打つ大人に望むこと」などについて一緒に考えました。ガイドラインにも多くは載っていない、医師にも正解のない質問のやりとりでしたが、だからこそ子どもたちの本音を聞くことができたように思います。子どもたちの率直な声に触れたことで、翌日の外来でも以前より少し気持ちを引き出しやすくなったように感じました。子どもの本音を引き出す様子を見て、保護者の方が驚き、喜んでおられたのも印象に残っています。このワークショップは、ワクチンに限らず、さまざまなテーマにも応用できるものだと思います。企画された皆さまには本当に頭が下がりますし、すべての小児科医にとって学びの多い場だったのではないのでしょうか。子どもから学べるこうした機会が、これからもっと増えていくと嬉しいです！ありがとうございました。（こどもグループ担当：門田行史）

私は日々の外来で子どもの話を聞くのが好きで、特に今は、接種できるのが18歳以下の点鼻インフルエンザワクチンフルミストを経験した子どもに毎回感想を聞いています。痛くないからいいとかサイダーみたいとかジンジャーエールを薄めたのが入ってきた感じとか、数秒のやり取りでも結構教えてくれる子がいて楽しいです。もしもっと時間があたら子どもたちはどんなふうに話してくれるのかなと思っていたので今回のワークショップはとても楽しみでしたが、実際はその期待以上のものでした。参加してきたという時点ですでにバイアスが生じているとは思いますが、子どもらしい素直な表現で意見を出してくれました。照れくさいのを隠そうとしていたりペアの子との距離を測って話したりすることも含め、丸ごと可愛かったです。今回終わって思ったことは、こどもまんなかとうたうのなら私たちは子どもの意見子どもの声をもっと聴く機会を持つべきなのではないかな、です。今回のように子どもの意見を聞く時間を設けて初めて引き出せるものがありそうです・とは言え参加者を募る時点で塾のテストなどで無理だった子が何人もいたように子ども自身も忙しい昨今、子どもの貴重な意見や気持ちが表出されないまま無いものになっていくのかと思うと歯がゆいです。ついでにその延長でWS後に自分の子育て時代を振り返ってみたらやはり聞いてあげる時間が少なかったことに気づき、もったいなかったなあと今さらながら忸怩たる思いに駆られたりしました。（こどもグループ担当：澤田雅子）

子どもたち自身がワクチンの痛みに対する武器を手にもすることも重要と思い、医学的に支持されている様々な方法を伝え、未来の可能性についても説明しました。その後の子どもたちのグループワークや発表内容を聞いていて、とても素直に情報を理解し、応用、発展させる力があることを感じました。子どもたちならではの

の発想にも触れることができました。

子どもたちと小児科医が協働することの重要性を感じる機会だったと思います。（親グループ担当：種市尋宙）



参加医師団からの総評（抜粋）

「インフルエンザ流行の中での開催にもかかわらず、本ワークショップの趣旨に非常にかなう形であったと感じました。（中略）特に印象的だったのは、ワクチンについて、接種前に**『副作用も含めてきちんと知りたい』**、必ずしも対面でなく、動画などの形で説明を受けられるのもよいといった、子どもたち自身から出された意見・提案です。（小坂仁：日本小児科学会理事）

「これは、ほんと、すごいワークショップでした。（中略）こどもたちがワクチンについても、自分たちの疑問や不安などの意見をもっていること、伝えることができること、に大変驚きました。同時に、もうひとつ気づいたことは、小児科医の教育技術の高さです。この健康教育の形こそが、今後の小児医療の中で必要とされていることだろうと思いました。」（永光 医師：前成育基本法推進委員会委員長）



今後の展望

今回得られた「子どもたちの声」は、小児医療の方向性を決定づける重要な示唆に富んでいます。日本小児科学会としては、これらの意見を以下の形で具現化することを検討し、子ども家庭庁への報告及び他の委員会との連携を進めてまいります。

1. 啓発資材の作成：ワクチンの周知資材、子ども向け説明動画、学校や地域で活用できる教材など、こども目線の情報提供ツール作成などの提案を、日本小児科学会内での関連委員会等に繋げる。
2. 政策提言：「痛みのない接種方法の開発」や「こどもへの十分な情報提供」などを盛り込んだ提言を行う。
3. 継続開催：参加者の期待に応え、次回（夏休み期間など）のワークショップ開催を検討し、継続的な「こどもの声」の聴取と社会への発信に努めます。

